



特別展

ほとけ  
「東アジアの仏たち」

4月27日(土)～6月2日(日) 本館

主催：奈良国立博物館

後援：読売新聞大阪本社

読売テレビ

NHK奈良放送局

平常展

「仏教美術の名品」

4月2日(火)～7日(日)

6月25日(火)～

月曜日休館

〔4月29日(月)は開館、翌30日(火)休館

5月6日(月)は開館、翌7日(火)休館〕

午前9時～午後4時30分

(入館は4時まで)

ただし金曜日は午後8時まで開館

(入館は7時30分まで)

〔写真説明〕

菩薩像幡 (東京国立博物館蔵)

中国・唐時代 長84.8cm

幡は、仏堂の内や外を飾る「はた」で、三角形の頭部の下に長方形の幡身と四条の幡脚を付け、左右に幡手を備える。本品は、中国の敦煌から請来されたもので、幡身に鮮やかな色彩で菩薩像を描いている。唐代の幡として保存もよく、絵画資料としても貴重である。



## 特別展「東アジアの仏たち」<sup>ほとけ</sup>

4月27日(土)～6月2日(日) 本 館

飛鳥時代にわが国にはじめて仏教が伝えられ、やがてその信仰のひろがりとともに、大陸のさまざまな仏教美術がもたらされ、わが国の仏教美術の展開に大きな影響を与えました。今回の特別展は、そうした多彩な仏教美術のうち、とくに仏の造形に焦点をあてて構成するものである。

展示は二部よりなり、まず第一部は、彫刻部門を中心とする時代別展示で構成する。すなわち中国・魏晋時代に制作され、大陸からもたらされた仏獣鏡（背面の文様に仏像を表現した鏡）をはじめとし、中国において北魏から唐・宋時代、また朝鮮半島において三国時代から統一新羅・高麗時代に制作され、わが国に渡来・請来された金銅仏や檀像を中心に、その作風の影響を受けながらわが国で制作された飛鳥時代から鎌倉時代までの仏像をあわせて展示する。

第二部は、絵画部門を中心に彫刻、工芸、考古、書跡の各分野を含めた主題別展示で構成する。まずわが国にもたらされた押出仏・博仏、密教法具や小塔などの工芸・考古遺品に表現された仏・菩薩の姿を紹介し、敦煌画をはじめとした唐時代の仏画、また仏の世界を具体化した変相図、密教の絵画、さらには羅漢・十王などを含む宋・元時代や高麗時代の仏画、あるいは写経の見返し絵に表わされた仏・菩薩の表現など、多彩な仏の表現を紹介する。

展観をとおして、大陸および半島からの舶載仏を鑑賞するとともに、さらにわが国の各時代にわたる仏たちの姿を再認識していただければ幸いである。

### 公開講座

5月11日(土) 「絵画に見る中国と韓国」

学芸課長 河原 由雄

5月18日(土) 「日本へ伝えられた東アジアの仏」

仏教美術資料研究センター仏教美術研究室長 松浦 正昭  
いずれも午後1時30分より、近鉄奈良歴史教室（近鉄奈良駅駅ビル4F）にて。聴講無料。午後1時開場。先着120名。

### ギャラリートーク

5月8日(水) 「中国と韓国の仏画」

美術室長 梶谷 亮治

午後2時より、本館陳列室にて。入館者聴講自由。

### 平常展「仏教美術の名品」 6月25日(火)～ 本 館

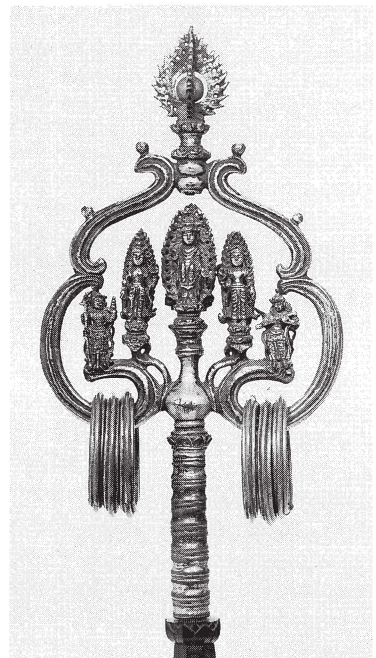
当館では、わが国の仏教美術に関する多くの文化財を収蔵・保管しているが、平常展ではそうした館蔵品・寄託品の中から、国宝・重要文化財を含む多数の仏教関係の優品を集めて構成している。

飛鳥時代から連綿と続く仏教美術は、寺院に祀られる仏像・仏画をはじめ、仏の教えを記した経典や様々な説話や縁起を題材にした絵巻、仏舍利や経典を収納する容器、堂内を飾り様々な儀式に用いる品々、そして寺院跡や仏教遺跡から出土する考古遺物など、多岐にわたっている。平常展では、こうした多彩な仏教美術を、彫刻・絵画・工芸・書跡・考古の各部門に分け、わかりやすく展示する。

今回は、新館が改修工事によって閉館中のため、通常新館でのみ展示をしている絵画・工芸・書跡の三分野を本館に移し、展示面積は狭いながらも、充実した展示を心がけ構成している。



◎木造如意輪観音菩薩像  
唐時代（法隆寺）



◎金銅錫杖 唐時代（善通寺）



特別展「東アジアの仏たち」

《第1部》  
【彫刻】1◎三角縁神獸鏡(京都大学文学部博物館)、2三角縁神獸鏡(東京国立博物館)、3三角縁仏獸鏡(宮内庁)、4三角縁仏獸鏡(東京国立博物館)、5三角縁仏獸鏡(京都大学文学部考古学研究室)、6◎三角縁仏獸鏡(園部町教育委員会)、7三角縁仏獸鏡(瀬戸内考古学研究所)、8仏獸夔鳳鏡(東京芸術大学)、9◎画文帯仏獸鏡(京都国立博物館)、10◎画文帯仏獸鏡(開善寺)、11◎画文帯仏獸鏡(五島美術館)、12画文帯仏獸鏡(東京国立博物館)、13画文帯仏獸鏡、14画文帯仏獸鏡(名古屋市博物館)、15画文帯仏獸鏡(宮内庁)、16如来坐像、17菩薩立像(法隆寺)、18菩薩立像(韓国・国立大邱博物館)、19◎如来立像(東京国立博物館)、20◎菩薩半跏像(東京国立博物館)、21◎菩薩立像(法起寺)、22菩薩立像(韓国・国立中央博物館)、23観音菩薩立像(正伝寺)、24菩薩立像(東京国立博物館)、25◎菩薩立像(法隆寺)、26菩薩半跏像(東京国立博物館)、27菩薩半跏像(延暦寺)、28菩薩半跏像(円覚寺)、29◎菩薩半跏像(観松院)、30菩薩半跏像(浄林寺)、31菩薩半跏像(牟田観音堂)、32◎菩薩半跏像(神野寺)、33◎菩薩半跏像(極楽寺)、34菩薩半跏像(慶雲寺)、35◎光背(東京国立博物館)、36◎弥勒菩薩半跏像(野中寺)、37◎観音菩薩立像(一乗寺)、38菩薩立像(法清寺)、39如来立像(報恩寺)、40如来立像(光明寺)、41菩薩立像、42菩薩立像(一乗寺)、43誕生釈迦仏立像(四天王寺)、44誕生釈迦仏立像、45観音菩薩半跏像(万松院)、46◎如来坐像(黒瀬観音堂)、47◎如来立像(海神社社)、48◎観音菩薩立像(堺市博物館)、49十一面観音立像(東京国立博物館)、50◎十一面観音立像(神福寺)、51◎十一面観音立像(当館)、52◎十一面観音立像(海住山寺)、53◎如意輪観音坐像(法隆寺)、54◎如意輪観音坐像(小松寺)、55◎諸尊仏龕(金剛峯寺)、56薬師如来立像(横蔵寺)、57◎薬師如来立像(聖衆来迎寺)、58◎兜跋毘沙門天立像(東寺)、59◎兜跋毘沙門天立像(清凉寺)、60◎五大虚空蔵菩薩坐像(東寺)、61◎釈迦如来立像(当館)、62◎釈迦如来立像(峰定寺)、63◎線刻水月観音鏡像(清凉寺)、64◎観音菩薩坐像(最御崎寺)、65◎観音菩薩立像(大山寺)、66観音菩薩立像(中国・上海博物館)、67◎五劫思惟阿弥陀坐像(東大寺)、68観音菩薩半跏像(清雲寺)、69菩薩坐像(法恩寺)、70観音菩薩坐像(泉涌寺)、71月蓋長者立像(泉涌寺)、72韋駄天立像(泉涌寺)、73韋駄天立像(長滝寺)、74善財童子立像(金滝寺)、75菩薩坐像(金谷寺)、76菩薩坐像、77如来坐像(金泉寺)、78如来坐像(黒崎釈迦堂)、79如来坐像(普光寺)、80地藏菩薩半跏像、81四天王立像(米国・ボストン美術館)、82不動明王坐像(米国・フィールド自然史博物館)、83天部立像(中国・上海博物館)  
《第2部》  
【工芸】84五鈷五大明王鈴(東京国立博物館)、85◎五大明王鈴(東京国立博物館)、86◎五鈷四大明王鈴(当館)、87◎独鈷四天王鈴(金剛峯寺)、88◎五鈷四天王鈴(弥谷寺)、89五鈷四天王鈴(藤田美術館)、90◎五鈷梵釈四天王鈴(西国寺)、91五鈷梵釈四天王鈴(藤田美術館)、92●錫杖頭(善通寺)、93◎錫杖頭(西国寺)、94◎銭弘(叡八万四千塔(誓願寺)、95銭弘(叡八万四千塔(東京国立博物館)、96銭弘(叡八万四千塔(当館)、97銭弘(叡八万四千塔(永青文庫)、98銭弘(叡八万四千塔(黒川古文化研究所)  
【考古】99方形独尊坐像埴仏(当館)、100方形阿弥陀三尊埴仏(当館)、101多宝塔埴仏、102如来倚像埴仏(東京国立博物館)、104五角形三尊埴仏、105方形二十尊連坐埴仏(大和文華館)、106小型独尊埴仏(大和文華館)、107方形独尊埴仏(京都国立博物館)、108金銅鍍鏤如来及び菩薩比丘五尊像(白鶴美術館)、109金銅鍍鏤如来及び菩薩比丘五尊像(根津美術館)、110金銅鍍鏤如来及び菩薩比丘衆諸尊像、111金銅板五尊仏像(奈良国立文化財研究所)、112金銅板五尊仏像(白鶴美術館)、113金銅板五尊仏像(白鶴美術館)、114鑄出如来三尊像(韓国・国立全州博物館)、115鑄出半跏思惟像(国立全州博物館)、116鑄出供養者像(国立全州博物館)、117鑄出化仏坐像(国立全州博物館)、118金銅鑄出三尊仏像(韓国・国立慶州博物館)、119金銅鑄出菩薩坐像(国立慶州博物館)、120金銅鑄出菩薩坐像(国立慶州博物館)  
【絵画】121●釈迦如來說法図(当館)、122仏涅槃図(中国・上海博物館)、123菩薩像残欠、124菩薩像幡残欠、125毘沙門天像(大和文華館)、126菩薩像幡(東京国立博物館)、127地藏菩薩像幡(東京国立博物館)、128二菩薩像幡(東京国立博物館)、129薬師曼荼羅(白鶴美術館)、130◎観音曼荼羅、131地藏・観音菩薩像(藤井齐成会有鄰館)、132◎須修十王生七経(久保記念美術館)、133◎弥勒菩薩像(清凉寺)、134●靈山変相図(清凉寺)、135◎文殊菩薩騎獅像(清凉寺)、136●普賢菩薩騎象像(清凉寺)、137仏国禅師文殊指南図讀(大谷大学図書館)、138◎釈迦三尊像(建長寺)、139釈迦三尊及び十八羅漢像(一蓮寺)、140◎釈迦三尊像(二尊院)、141◎釈迦三尊像(東福寺)、142◎阿弥陀浄土図(知恩院)、143阿弥陀如来像(金蓮寺)、144◎観経十六観変相図(阿弥陀寺)、145観経序分義図(円照寺)、146◎阿弥陀三尊像(清浄華院)、147◎阿弥陀如来像(成福院)、148阿弥陀如来像(金蓮寺)、149◎阿弥陀如来像(西福寺)、150◎如来像(金剛峯寺)、151◎仏涅槃図(長福寺)、152◎仏涅槃図(当館)、153八相涅槃図(叡福寺)、154◎諸尊集会図(満願寺)、155法華経曼荼羅(道隆寺)、156◎千手観音像(永保寺)、157◎勢至菩薩像(長命寺)、158●孔雀明王像(仁和寺)、159十六羅漢図(宮内庁三の丸尚蔵館)、160◎十六羅漢図(清凉寺)、161◎十六羅漢図(相国寺)、162◎十六羅漢図(東京国立博物館)、163十王図(米国・メトロポリタン美術館)、164◎十王図(当館)、165◎地藏十王像(永源寺)、166◎十王図(当館)、167◎六道絵(新知恩院)、168観経十六観変相図(知恩院)、169観経序分義図(西福寺)、170弥勒下生経変相図(知恩院)、171◎阿弥陀如来像(正法寺)、172阿弥陀如来像、173阿弥陀如来像(萩原寺)、174◎阿弥陀如来像(根津美術館)、175伝薬師如来像(萬松寺)、176◎阿弥陀三尊像(上杉神社)、177文殊及び普賢菩薩像(静嘉堂文庫美術館)、178◎阿弥陀三尊像(専修寺)、179阿弥陀三尊像(知恩寺)、180阿弥陀三尊像、181◎阿弥陀八大菩薩像(松尾寺)、182阿弥陀八大菩薩像(広福護国禅寺)、183◎楊柳観音像(泉屋博物館)、184◎楊柳観音像(聖衆来迎寺)、185楊柳観音像(大和文華館)、186◎主夜神像(西福寺)、187地藏菩薩像(善導寺)、188地藏菩薩像(根津美術館)、189地藏菩薩像(徳川美術館)、190◎地藏十王像(静嘉堂文庫美術館)、191◎地藏十王像(日光寺)、192◎摩利支天像(聖沢院)、193五百羅漢図(出光美術館)、194五百羅漢図(大和文華館)、195五百羅漢図(東京国立博物館)  
【書跡】196◎版本金剛般若経(清凉寺)、197◎版本細字法華経(伝香寺)、198版本細字法華経(雲龍院)、199版本法華経(大東覚記念文庫)、200◎版本法華経(西大寺)、201版本法華経(栗棘庵)、202紺紙金銀字華嚴経(京都国立博物館)、203紺紙金字法華経(徳川美術館)、204白紙墨書華嚴経(韓国・三星文化財財湖巖美術館)、205◎紺紙金字大宝積経(京都国立博物館)、206◎紺紙銀字文殊師利問菩提経(京都国立博物館)、207紺紙金字蘇悉地羯羅供養経(西明寺)、208紺紙銀字法華経(宝積寺)、209紺紙金字法華経(大乗寺)、210紺紙金字法華経(天倫寺)、211紺紙銀字法華経(羽賀寺)、212紺紙銀字法華経(鍋島報効会)、213紺紙金字法華経(鍋島報効会)、214紺紙銀字法華経(根津美術館)、215紺紙銀字法華経(東北大学附属図書館)、216紺紙金字金剛般若経(太平寺)、217紺紙金字華嚴経(徳川美術館)、218紺紙金字華嚴経(徳川美術館)、219紺紙金字華嚴経(大和文華館)



●諸尊仏龕 唐時代(金剛峯寺)

平常展

本館

6/3(月)～6/24(月) 陳列替えのため休館

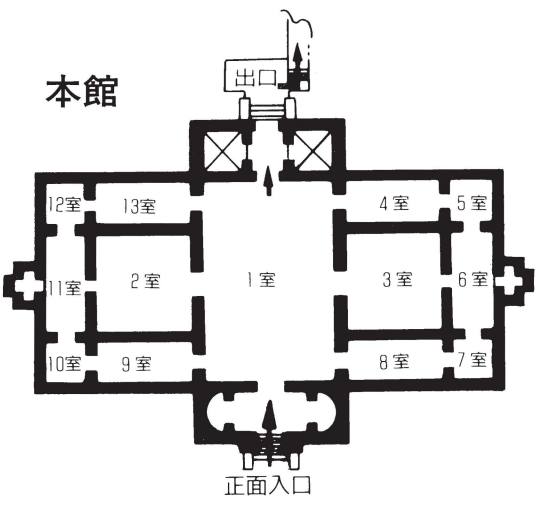
【彫刻】[1室]◎銅造誕生釈迦仏像(正眼寺)、◎銅造弥勒菩薩半跏像(神野寺)、◎銅造観音菩薩立像(法起寺)◎銅造観音菩薩立像(金剛寺)、◎銅造誕生釈迦仏像(悟真寺)、◎木造菩薩立像(金竜寺)、●銅板法華説相図(長谷寺)、◎木造勢至菩薩立像(法隆寺)、◎乾漆十大弟子立像のうち舍利弗・目犍連像(興福寺)、●木心乾漆義淵僧正坐像(岡寺)、◎木造西大門勅額(東大寺)、◎木心乾漆阿閼如来坐像(西大寺)、●木造薬師如来立像(元興寺)、◎木造十一面観音立像(当館)、◎木造十一面観音立像(海住山寺)、◎木造弥勒坐像(東大寺)、●木造薬師如来坐像(当館)、◎木造十二神将立像(東大寺)、◎銅造蔵王権現立像(当館)、◎木造千手観音立像(園城寺)[2室]◎木造如意輪観音坐像(当館)、◎木造阿弥陀如来坐像(当麻寺)、◎木造金剛力士立像(財賀寺)、◎木造釈迦如来坐像(東大寺)◎木造十一面観音立像(地福寺)、◎木造十一面観音立像(勝林寺)、◎木造日羅立像(橘寺)[3室]●銅造灌仏盤・誕生釈迦仏立像(東大寺)、◎木造行賀像(興福寺)、木造弥勒菩薩立像(林小路町)、◎木造地藏菩薩立像(東大寺)、◎木造地藏菩薩立像(長命寺)、◎木造地藏菩薩立像(春覚寺)、◎木造愛染明王坐像(当館)、◎木造馬頭観音立像(浄瑠璃寺)、◎木造釈迦如来坐像(東大寺)、木造四天王立像(靈山寺)、◎木造閻魔王倚像(金剛山寺)、◎木造聖徳太子立像(成福寺)、◎銅造阿弥陀如来立像(善光寺)、◎木造千手観音立像(妙法院)  
【絵画】[4室]絹本着色両界曼荼羅、◎絹本着色一字金輪曼荼羅(写真)、◎絹本着色大仏頂曼荼羅、◎絹本着色釈迦三尊像、◎絹本着色千手観音像、◎絹本着色如意輪観音像、[5室]◎絹本着色文殊菩薩像、◎絹本着色地藏菩薩像(以上当館)、絹本着色孔雀明王像[6室]◎絹本着色五大尊像、◎絹本着色不動明王八大童子像(以上当館)、絹本着色二河白道図(薬師寺)、絹本着色法華経曼荼羅(当館)、●絹本着色聖徳太子及び天台高僧像(一乗寺)  
【書跡】[7室]◎感夢記(園城寺)、◎七大寺日記(当館)、浄蔵法師伝(当館)、○神護寺交衆任日次第(当館)[8室]華手経卷第十二(五月一日経)(当館)、◎増一阿含経卷第五十(善光寺朱印経)(薬師寺)、●金光明最勝王経(百済豊虫願経)(西大寺)〈写真〉、瑜伽師地論卷第八十九(舎人国足願経)(当館)、●紺紙金銀交書大般涅槃経(中尊寺経)(金剛峯寺)、紺紙金字大智度論(神護寺経)(当館)、紺紙金字法華経(興聖寺)  
【工芸】[9室]●金銅迦陵頻伽文透彫華鬘(中尊寺)、●金銅宝相華文透彫花籠(神照寺)、◎紙胎彩絵蓮華文花籠(万徳寺)、◎蓮唐草蒔絵経筒(当館)、◎金銅唐草文透彫経筒(万徳寺)、◎銅三具足(聖衆来迎寺)、金銅柄香炉(高山寺)、●金銅密教法具(厳島神社)、金銅一面器(西大寺)[10室]◎金銅宝相華文線刻如意(当館)、金銅錫杖頭(当館)、金銅錫杖頭(当館)、◎銅梵鐘(当館)[11室]百万塔及び陀羅尼(当館)、銅銭弘(叡八万四千塔(当館)、銅宝篋印塔(当館)、●金銅透彫舍利容器(西大寺)、◎黒漆舍利厨子(般若寺)、黒漆四方殿舍利厨子(能満院)  
【考古】[11室]◎金峯山経塚出土鍍銀経箱(金峯神社)、銅経筒(平治元年銘)、瑠璃鈕銅宝幢形経筒、和歌山・粉河経塚遺物、飛鳥文陶製外筒、◎石製弥勒如来坐像、◎伝福岡県出土銅経筒・滑石外筒、◎伝福岡県出土経塚遺物(以上当館)[12室]◎線刻蔵王権現鏡像(金峯山寺)、伝和歌山・白浜経塚出土品(当館)[13室]◎東大寺金堂鎮壇具(東大寺)、靈安寺塔跡鎮壇具、◎佐井寺僧道薬基誌及骨壺、◎山代忌寸真作及妻基誌、○行基舍利瓶断片、◎出雲萩村古墓出土品(以上当館)、◎青磁鉢附瓦製鉢(正暦寺)



◎一字金輪曼荼羅 (当館)



●金光明最勝王経(西大寺)





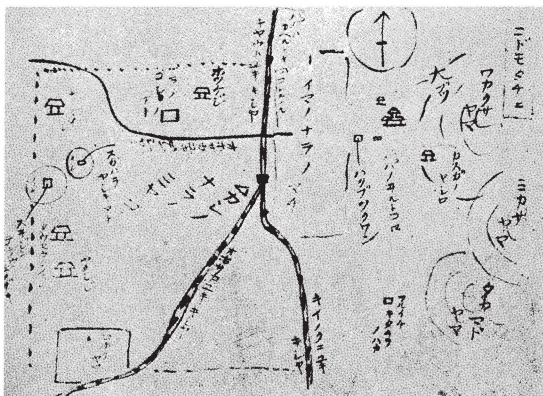
## 奈良国立博物館と森鷗外

小説家・評論家として多くの著作を残し、また軍医でもあった森鷗外（林太郎）が、帝室博物館総長兼図書頭として、また帝室美術院長として功績のあったことは世にあまり知られていないかもしれません。今回は、奈良国立博物館や正倉院との関連も深い鷗外の一面を紹介します。

鷗外は、文久2年（1862）1月19日、島根県津和野町に生まれました。明治5年に上京、14年に東京大学医学部卒業後、軍医の道を進みます。明治17年から21年までドイツに留学、教養と見識を深め、帰国後医学界・文学界に大きな影響を与えたことは改めて述べるまでもありません。

その鷗外の晩年は、大正5年4月に陸軍軍医總監、陸軍医務局長という要職を退き、臨時宮内省御用掛、大正6年12月25日に帝室博物館総長兼図書頭に任ぜられ、大正11年7月9日に61歳で現職のまま亡くなるまでこの職にありました。

鷗外が職にあったころの博物館総長は、東京・京都・奈良の帝室博物館と正倉院事務等を統括する要職でした。鷗外は、その多岐にわたる職務を極めて勤勉に遂行し多くの業績をあげました。東京帝室博物館においては、はじめて陳列品の時代呼称を定めて展示を時代順に改め、また大正8年には研究紀要である『帝室博物館学報』第1冊を刊行。博物館における研究とその公表の重要性を示しました。さらに自ら博物館の蔵書の一冊ごとに丁寧に書誌記述を加えたりもしています。こうした展示の近代化や博物館における研究を重視する鷗外の考え方は、おそらくドイツ留学等において培われた、かれの広い視野と見識に基づいたものでしょう。一方、正倉院は明治41年（1908）4月に帝室博物館の主管となり、東京国立博物館に正倉院掛



大正7年11月 森茉莉・森杏奴・森類宛



が置かれ管理されていましたが、やがて大正3年

（1914）9月16日に奈良帝室博物館に移管されます。鷗外は、毎秋行われる曝涼（虫干し）や臨時の開閉封に立会いのために、大正7年・8年・9年・10年の秋と、大正11年の5月にイギリス皇太子（後の

ウィンザー公）の来日につき奈良に出張しています。

奈良滞在の鷗外の生活については、松島順正氏（元正倉院事務所保存課長、故人）が『正倉院と鷗外』（『正倉院よもやま話』学生社）の中で記しておられます。松島氏は父君が帝室博物館に勤務され、当時博物館の官舎に住んでおられました。鷗外は滞在中この官舎を宿舍とし、十畳と六畳の部屋を使われていたそうです。

奈良滞在中、鷗外は頻繁に子供に宛て、手紙や奈良で買い求めた絵はがきを送っていますが、中には博物館周辺の略図を描き、宿舍の位置に「パパの居るところ」と注記を加えているもの（図版）もあり、子供おもしろい一面も窺われます。なお、官舎は、現在の当館敷地の北東隅にありましたが、昭和二十年代に取り壊され、その官舎の敷地にあった銅板ぶきの屋根をもつ木造の門（高さ約2メートル、間口約3.5メートル）だけが残っています。

鷗外の正倉院における公務は、曝涼等に伴う宝庫の開閉の立会いをはじめ、曝涼の期間に行われる宝庫観覧等の事務や東京帝国大学史料編纂掛による正倉院文書の調査、染織品（古裂）の整理・修理の監督などであり、思いのほか多忙であったと思われます。鷗外はここでも、従来身分の上位の者だけが対象になっていた宝庫観覧を研究者にも門戸を開くなど近代化に努めました。

こうした奈良滞在中の鷗外の実情については、短歌集『奈良五十首』や日誌『寧都訪古録』に記されていますが、それらからはまた、公務以外の時間も奈良の古社寺や旧跡を精力的に訪ねていることが知られ、鷗外の歴史や古文化に対する関心の深さが窺えます。



## 親と子の文化財教室

平成8年度〈鎌倉時代の歴史と美術〉 主催：当館 後援：奈良県教育委員会

平安時代のおわりに武士が登場すると、それまで政治や文化に大きな影響を与えてきた貴族はしだいに力を弱め、かわって武士が勢力をもつようになりました。貴族を中心とした華やかな平安の文化は、力づよい武士の文化へとかわっていきました。そしてそのころ奈良では、戦乱によって焼失した東大寺や興福寺のお堂や仏像の復興に多くの人々がかかわり、新しい建築や美術が生み出されました。

この教室は、鎌倉時代の歴史や美術について親子で学び、実際に作品を見たり、遺跡やお寺を見学しながら、大切に守られてきた鎌倉時代の文化財について考えてみようというものです。

### 〈年間予定〉

- 5月11日(土) 鎌倉時代の歴史
- 6月8日(土) 鎌倉時代の高僧たち
- 7月13日(土) 鎌倉時代の建築（現地見学を含む）
- 8月10日(土) 鎌倉時代の仏師－運慶と快慶－
- 9月14日(土) 東大寺と興福寺の仏像（現地見学を含む）
- 10月12日(土) さまざまな塔のかたち
- 11月9日(土) 鎌倉時代の工芸品
- 12月14日(土) 鎌倉時代の絵画



〈会場〉 国際奈良学セミナーハウス・奈良国立博物館展示室ほか（現地見学もあります）

〈時間〉 午前9時30分～11時30分

〈対象〉 小学校5・6年及び中学生とその保護者等（生徒のみの参加も可）

〈定員〉 50名（保護者を含む）

〈参加費〉 無料（ただし、見学科金等が必要な場合があります）

〈講師〉 奈良国立博物館 研究員

〈申し込み方法〉 往復はがき（または電話）で、希望日・住所・氏名・学校学年・電話番号、いっしょに参加する保護者等の氏名を記入の上、奈良国立博物館「親と子の文化財教室」係

〒630 奈良市登大路町50 ☎0742（22）7771までお申し込みください。

## お知らせとおことわり

ただ今、第二新館の増設と現新館の改修工事のため、たいへん御迷惑をおかけしています。しばらくのあいだ、新館が休館となるため、八窓庵茶室の公開・利用およびハイビジョンの放映は休ませていただいております。御了承ください。

## 夏季講座中止のお知らせ

本年度の夏季講座は、講堂が閉鎖中のため実施いたしません。あしからずご了承ください。

## 夜間開館のお知らせ

4月1日から11月30日の毎金曜日は午後8時まで（入館は7時30分まで）開館します。

**開館時間** 午前9時より午後4時30分まで（入館は午後4時まで）

毎金曜日は午後8時まで（入館は7時30分まで）

**休館日** 月曜日（月曜日が祝日または振替休日の場合は開館し、翌火曜日が休館）

**観覧料金** 毎月第二・四土曜日は、小・中学生無料

特別展		大人	高・大生	小・中生
	一般	790	450	250
	団体	530	250	130

平常展		大人	高・大生	小・中生
	一般	400	130	70
	団体	200	70	40

（団体は責任者が引率する20名以上。）

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し返信用封筒（80円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館の普及室にお申し込み下さい。

〒630 奈良市登大路町50 電話0742-22-7771 FAX0742-26-7218 テレホンサービス0742-22-3331 **奈良国立博物館**